

昭和三十三年十月二十四日 講演

## 「自然と人生」

私は書く方が仕事でありますから、立つて話す事は滅多にないので、立つていると頭がいう事を利かないので、腰掛けていると幾らか頭が動き、それで此頃何処へ講演に行きましても、立つて講演したら述べる事に、私は責任が持てない。然し、腰かけて喋れば、喋り損つても責任を持てる様な気がして、今日も幾らか責任を持った事をお話したいと思うので、腰かけてお話ししてみたい。

私はなるだけ講演は断っているのが事実でありますけれども、電話で頼んで来ると非常に断りいいのですが、来て頼まれるとつい安請合の病気がありまして、話している中に行つてもいいような気になりまして、後で後悔するのですけれども、もう約束してしまつたものはやはり守らないと気が済まない感じがして、体が丈夫である限りは何処へでも出かけて、約束すれば喋る事になっているわけなんです。

私のお話しする事は、私は書く方が仕事でありますから、大概何処かに書いてあるわけでありまして、一日の中何か考えて居りますから、

一日一日幾らか進歩したという風に考えて居りますから、今日此処で喋る事は、前に書いたものより幾らか進歩していい筈でありますけれども、仲々そううまくは進歩しませんから、今日お話しする事も、私が何処かに散々書いた事を、書き古した様な事をお話しする事になるかと思つてあります。それを一々気にしていたら何もしゃべれなくなりますから、そういう事は全く気にしないで、頭に浮んで来る俣にお話ししてみたいと考えて居ります。

私は人間というものに生れて来たのであります。何故人間に生れたかという事は私には解らない。皆さんも恐らく解らないだろうと思つてあります。然し私達が気がついた時にはもう人間になつていた時でありまして、これはどうも事実だといふふうには私に考えているのです。ところが我々が今日ここで生れて生きているというのにはやはりどうしても先祖がなければならぬのは事実だと思つて居ります。先祖がどのぐらゐ過去に戻つて行くか私には解りませんが、やはりマンモスとか、もつと前、

地球がこの地上に出来て、それから生物が何時此の地上に生れたか解りませんが、その生物が此の地上に生れた時に、既に我々の先祖がその中に生れていたのではないかと。無から有は生じない。私は、初めに此の世に生物が生れた時に、それはどういふ理由で生れたかは解りませんが、生物として生れた時に既にそのものが人間になるだけの種がそこに仕組まれていたのではないかと。いふ風に此頃考えているのです。

私は、どういふ理由であるか知りませんが、生命の中の法則に何か生命というものがだんだん複雑になり、まただんだん賢くなる様に、なりたい様に造られているんだという風に考えているのです。そういうのがだんだん成功して来ましたがどうかして、だんだん高等な動物が此の地上に現われて参りまして、その点では今日では人類が一番高等な動物として此の地上に君臨しているのは事実だと思つて居ります。人間が此の世に生まれまして、人間が生れたら必ず我々が生れるというものではありません。

作家 武者小路実篤先生

けれども、そういう場合を一々考えていてはきりがありませんか、我々は生れたという事を先ずこうして認めますけれども、然し我々が未だ此の世に生命を産んだものの理想的な動物であるかという、私はそうではないという風に考えているのです。まだ人間というものは進歩の途上にあつて、まだ今後人類がどんな進歩して行くと、遂には、何か、我々を此の地上に産んだ者が満足する様な生物が、此の地上に生れ出るのはないかと考えているのです。

それが人間であるか、或いは人間以上の動物であるかという事は私には解りませんけれども、兎も角そういうものが仮に生れる事が出来たとしたら、それは我々の想像を絶した様な生物であるかも知りませんし、また人間として美な、最も立派な人間であるに過ぎないかも知りません。けれども、兎も角その生物が此の地上に生まれたら、私そのものは死であると考えているのです。まだ我々は途上の動物であるから我々は死ななければならぬ。後の者に席を譲つて自分よりもっと進歩したものに席を譲つて、自分はこの地上から去つて行かなければならないのが、我々の今日の人間の運命だという風に考えているのです。

然しそれであるから私は人間というものは死が最後であるという風には、私は考えていないのです。此の人間というものが此の地上に生

れたのは、何かやはり使命といえますか、何か目的があつて、その目的のために我々が生れさせられているのだから、その目的に適う様に我々がもし生きる事が出来たならば、その時には我々はそれで満足が出来る様に同時に造られていて、私は考えているのです。

我々の肉体の方を仮に考えてみましても、私はそう思うのが本当だと考えているのです。例えてみれば人間の手なら手を一つ考えてみましても、これ以上の手は我々に考える事が出来ないほどのものを与えられていると思うのです。ですから古今東西の優れた芸術家が神の像（すがた）や仏の像を作る時に、彼等は手ばかりではありませんけれども、全部人間の肉体を与えている。それ以上のものを彼等が創造出来たら、彼等は神や仏の像を書く時には彼等が人間以上の像をそのものに与えないでは居られなかつたのではないかと思うのです。近代の優れた芸術家達はそれを知らない者共でありますから、彼等が人間の姿以上の像を創造することが出来たならば、彼等は喜んでそれを書くだけの大胆さは充分持つていると思うのであります。しかし彼等が描いた動物の姿を見ましても、彼等がこんな姿を持つては困るというよなものを沢山描いて居りますけれども、そういう像を持つことが出来たら、或いはこういう手を持つことが出来たらさぞいいだろうとい

う風な、我々が憧れるに足る像を描いたものは、未だ曾て一度も見ることがないのは、皆様の御承知の通りだろうと思います。私達に与えられた肉体の姿、特別に手を例に取つてお話しする方が話がいいので、私は手を一つの例として取つて来たのでありますが、これ以上のものを我々は創造出来ないと思つてはいます。

またこれ程実用向きな手は、我々には考え出せない。実に此の手というものは、我々人間に与えられている手は、何でも作りたいものは作れるし、また字でも絵でも何でも書きたいものは書けるし、音楽もまたどんな音楽でもそれを奏する事が出来る様に、我々の手が造られていると思つてはいます。むしろ我々の手が牛や馬みたいなものであつたとしたら、我々は何も作り出す事が出来ないのは云う迄もない事でありますが、然し彼等は彼等でそれで不満足かというところはそうではないと思つてはいます。

牛や馬は彼等の足でもつて満足して、彼等は何も作り出そうという事を考える必要のない頭を与えられているから、彼等は彼等でそれで満足して、山野を我々以上に早く走る事が出来たり、また彼等の食いたい食物を充分それで食う事が出来て、決して彼等が彼等の足を人間の手の様なものを持たないで生まれさせられた事を不平に思う様には造られていないと思つてはいます。

私は彼等のすべての動物が、その肉体を見ればその動物の頭の程度、また頭が何処迄進歩出来るかという程度が自ずと分るのではないかと考へて居りまして、此の自由自在な何でも作り出す事の出来る能力のある手を与えられてゐる人間というものは、その頭脳もまたそれに相応しいだけの自由さの頭脳が与えられてゐるべきであるし、また事実与えられてゐるべきです。若し人間が仮に人間を造るという事になつて、人間が人間を造り出す事が出来たとしたら、今の我々の人体よりもっと以上のものが造り出せたかといへば、云う迄もなく造り出せなかつたと私は思うのです。よく愚かな親達は自分の思う通りの子供を産む事が出来たらさぞいいだろうと仮に思う事があるかと思ひますが、若し彼等が自分の思う通りの人間を作り出す事が出来なかつたら、その子供が一日も生きて行く事が出来ないのは事実であるし、その姿も必ず何処かに欠点があつて、我々が見て必ずしも美しいものがあるとは云えない様なものになるだろうと思ふのです。

火星に於ける生物がどんな姿をしてゐるかと思つて人間が想像して描いた絵を——今でも別にそれから進歩もしていないのでありませんが——若い時に見て、あんな姿には何処に美があるかと思ひし、ヒョロヒョロしたタコの足が細長くなつた様な、あんな手足では何一つ

作り出す事の出来ない、あんなものをただ重力や何か色々の物理的な所から考へ出してそれで満足してゐる人間と、我々を創り出した者との距離はどのくらい大きいかという事が、私はそこからでも解ると考へてゐるのです。

つまり私達が想像する以上の者が、私達を造つていてくれる。それは自然であるか、何であるかは私には解りませんが、然し私の考へでは、やはり私達は自然のままに造られてゐる。或いは言葉が不十分でありますけれども、兎も角私達が人間が造り出すよりは、もつと靈妙不可思議なものが人間の生命というものを考へて、そうして造つてくれたといいたい程、我々の肉体というものがよく造られてゐると思ふのです。

仮に神様が人間を造つたとすると、私は人間の造られ方には相当不服が云いたい部分があると思ふのです。然し自然が段々色々の動物から進化して、そうしてその人類を此の地上に生み出したとすると、私は随分自然というものが私達の想像以上の能力を持つてゐるんだという事を信じないわけには行かないのです。例へてみれば、一粒の杉の種からあの杉の大木になるだけのそういう秘密といひますか、そういう能力というものが我々人間には想像の出来ないもんだと思ふのであります。これは杉の種に限らず、あらゆる植物あらゆる動物に於いて

同じ事が云えるだろうと思ふのです。ですから私達は人間の智慧で創造の出来ない何かの能力が我々に与えられてゐると考へても不都合ではないと思ふのです。私は考へれば考へる程人間というものが、造られた儘に生きて行くのが本当であるし、またそれでいいんだという風に考へてゐるのです。

私達の肉体の事を考へてみましても、何か体に一寸した怪我をしたり何かして痛みを感じる場合もある場合、痛みがそんなに強く我々を苦しめないでもいいのではないかという風な考へを持つ瞬間がありましたけれども、然し考へようによれば、そのぐらゐの苦痛が我々に与えられてゐなかつたら、私達は此の地上に生きてゐられなかつたのではないかと思ふのです。例へてみれば、歯なら歯が痛みました時、その痛みが我々が辛抱出来る程度の痛みでありましたら、私達は不精者でありますから辛抱して済まして歯を癒しに医者に行くのが面倒だから、ほつたらかして置けという様な気持で、歯がどんどん悪くなるのをそのまま見送つて生きていたろうと思ふのです。ところがそれ以上の苦痛が与えられて私達がどうしても辛抱出来ないという風な苦痛が与えられてゐるから、否応なしに歯医者へ出かけて行って歯を癒すのが事実だと思ふのです。それと同じ様に我々の体でも、我々の病氣やその他の怪我をした時

にしても、所謂体に故障があつた時に、その痛みが我々の辛抱出来る程度でありましたら、それを辛抱してしまつて自分の体がどんなに悪くなつてももう取り返しのかない時迄、目が醒めないだらうと思つてのです。そういう程度に我々が造られて以上は、我々を何のため此の地上に生かさうと思つているかは解りませんけれども、兎も角此の地上に我々を生かさうと思つている者は、それに相応な苦痛を我々に感じさせる様にしてくれたのも止むを得ない事だとは考へて居るのです。むしろその肉体の苦痛が強ければ強いだけ、私達を此の地上に生かしたがつて居る者の意思が相当強いんだという事を認める方が、私は素直な見方だと考へて居るのです。

一番健康な状態はどういう状態かということ、自分の肉体をすっかり忘れる事が出来た時が一番健康な状態だと私は考へて居るのです。私達が何処か歩きますんでも、足に少しでも故障がありますと自分が足で歩いて居るといふことを意識しなければなりませんけれども、足が何処も悪くない時は、足で歩いて居るなんて考へる必要なしに、行きたい所へどんどん行けばそれでいいんだと思つて居るのです。また歯なら歯が悪くない時は、私達が歯で物を嚙んで居るなんて事は少しも意識する必要なしに、歯の事を全く忘れて物を喰べて居る時が、一番歯の丈夫な

時であるという事が云えるだらうと思つて居る。す。

また私達が何か仕事をしたり運動をしたり物を考へたりする時も、肉体の事をすっかり忘れる事が出来た時が、一番健康な状態だという風に私は考へるのです。そうならば肉体の健康が一番人生に取つても目的であり、望みであるかということ、私は勿論そうではないと考へて居るのです。何故かと云へば私達はどんなに肉体が健康であつても何れは死ぬのでありますからして、肉体が若し我々の理想であつたら、我々の人生というもの、実につまらないものであつて、死刑を宣告されたソクラテスか誰かが云つた言葉であつたと思つて居りますが、つまり死刑というものを宣告を受けて居る、それが早く来るか遅く来るかに過ぎないという様な考へ方に堕してしまふ。そういう考へ方になると思ひます。

然し私達は、肉体が我々の理想ではないと思つて居る。我々にとつては、肉体の健康は最初の条件にはなるけれども、最後の目的にはならないと思つて居る。むしろ最後の目的を達するために肉体の健康が必要だから、我々が肉体の健康を大事にする。これがつまらないかどうか知りませんが、他の例をとると農夫の人達が鋤や鋤をきれいにする様のものであつて、鋤や鋤をきれいにして、それを床の間に飾つて置いた

めではなくして、鋤や鋤をきれいにするのは、働く時に働きたいように、自分の働く目的をよく叶えるために、鋤や鋤を磨いて置くのだと思つて居る。それと同様に、我々の肉体の健康も、肉体の健康が目的ではなくて、その健康で自分のしたい事が出来る、自分のしたい事をする事が目的であつて、そのために肉体の健康が大事なんだと思つて居るのです。

私は肉体の苦痛にしましても、また色々の喜び、感じの良さにしましても、それらのものは皆自分達が造り出したものではなくて、自然から与えられたままを私達は感じて居るのに過ぎないと思つて居る。ですから、肉体の苦痛にしましても、私達が勝手に苦痛を感じるのではないし、健康の喜びを感じるのも、私達が勝手に感ずるのではなくて、そう感ずる様に我々が造られて居る。その造られたままに私達は感じて居る。そして自分の嫌な事はなるべく避けて、自分の喜びはなるべく求める様にして行くのが私達の自由といふのですか、何か自分達の選ぶ権利があるか知りませんが、一番色々の感じは自然に造られた僕を私達は感じて居るのに過ぎないと私達は思つて居るのです。その感じを私達が尊重して行くこと、結局肉体の方の問題になると、我々は何処迄も自分の健康を大事にして行くこと、それで健康を損ねない様に注意をして行く方が賢いという事がいえるだらうと思つて居る。

のです。

肉体ばかりではなくて、我々の感情にしましても、私は人間が勝手に造ったものではなくて、何か人間にこういう風に生きる事を望んでくれる、その望みを満たすために我々は感情に支えられているのであって、その感情を本当に生かす事を知る時にはじめて私達がどういう風に生きるのが本当かという事が臆気乍ら解るといふふうに私は考えているのです。我々の喜怒哀楽にしましても、我々が勝手に喜怒哀楽を感じるのではなくて、喜怒哀楽を感じないではいられない様な状態に置かれた時にはじめて喜怒哀楽を感じるのだと思うのです。ですから私達が悲しい時とか、嬉しい時とか、子供の悩みがある時とか、そのままの状態が我々にいい状態ではなくて、そういう状態から抜け出ようとするその抜け出方を賢く抜け出る事が出来たらば、それが我々に望まれている生活にピッタリするんだと思うのです。

その著しい例を一つ挙げてみれば、親が子供の病気をした時に、その病気を心配しないではいられないのは事実だと思ふのです。これはやはり子供というものを、人類が此の世から絶滅する事を望んでいてくれないとすれば、人類が段々栄えて行く事を何か望んでいるとすれば、その者が必ず親に子供を愛させなければならぬと思ふのです。その愛がある限りは、子

供が病氣してそれを親が喜ぶというわけには行かないように出来ていると思ふのです。子供を失った親の悲しみというものは、我々には想像の出来ない、想像するだけでも、たまたない事実だと思ひますが、我々がそういう風に勝手に感ずるのでなくて、そう感ずる様に我々を造つていてくれたからこそ、我々が今日生きているのであって、若しそういう風に造られていなかったら、先祖のうちに人類が滅びてしまつて、私達が生れないで死んだのだと思ふのです。生れて良かったか悪かったかは、歴史として問題に出来るかと思ひますけれども、我々が生きていくという事実を証明するためには、どうしても親が子供を愛さなければならぬ。子供を健康によく生かしていききたいという風に我々が造られていることを、事実として認めないわけには行かない。そのために子供の病氣は心配しないわけには行かないし、その病氣が癒つた時は、親は喜ばなければならぬ。その喜びの深さにこそ、人類を此の地上に生かしたがっている者の意志が充分に表れているという風に考へているのです。ですから親が子供の病氣を心配し、また子供が悪い事をする時に、親が心配する。その心配の深さをみて、何者かが我々の子供が健康に育ち、我々の子供がまた邪道に入らずに正しい姿で生きていく事を望んでいてくれるという事が解ると思ふのです。自

分の子供が悪い病氣をした時の、親の歎き、親の苦しみといったものは、私は想像出来ないもんだと思ふんでありますが、これも親が勝手にそういう風に思ふのではなくて、そういう風に思ふ様に、我々を造つていてくれるからだと思ふのです。

そういう風に私達は考えて行きますと、人間というものはどういふ風に生きる事が本当かという事も、だんだん解つていくと思ふのです。自分の事になりますと私達は本能的な事がありまして、それが病的な場合がありますから、自分の場合では善悪正邪というものがはつきりしない場合があるかと思ふのであります。が、これが他人の場合に起きると、私達は相当正確に健全にその者の善悪を感ずる事が出来、またそれに対して憤りや、讚美する気が起り、また起り得るんだと思ふのです。例えば新聞なんか見まして、私達が利害関係のない、どういふ人か知らない人でありまして、その人を自分の利益のために殺したり、また自分の欲望のためにその人に傷つけたりする話を聞けば私達は腹を立てないわけには行かないと思ふのです。そういう事をしたものに対して私達は憤りを感じて、何とかしてやらないでは腹の虫が納まらないという気持を持つのは事実であります。こういう気持を持つのも、同じ事を繰返す事になりますけれども、私達が勝手に持つので

はなくて、何者かが私達に皆が幸福で倅せである事を望んでいてくれるから、それに反する行動に対して、私達が正義感に打たれ、またそれに不快の感じを持ち、またその憤りを感じないではいられない様に造られているんだと、私は思うのです。

それに反して新聞なんか読みまして人を助けた話だとか或いは一寸した美談の話を書きますと、その話に私達はすぐ割に簡単に感動しまして、人間というものは愛すべきものであるという考えを持ちます。私も年取って涙もろくなってきたせいもありますけれども、そういう話を聞くとつい涙ぐむ様な気になって、人間というものが思ったより愛すべきものであるし、また美しいものであると云う様な考えを持たないわけには行かないんだと思うのです。これも私は人間というものがお互い助け合って、お互いに喜び合う様に何かが作っていてくれるから、そういう美しい話を聞くと、それが極く僅かな事であっても私達はそれに感動しないわけには行かないんだと思います。

そういう風に考えて行きますと、少し結論が早いかも知れませんが、私達は先ず自分達に託された一つの生命を出来るだけよく生かして、皆がはがゆく思わない、皆が喜んでくれる様に、自分自身も喜んで居られる様に、気がとがめない様に、自分を出来るだけ完全に生

かす様にする事が先ず第一の務めだと思おうのです。それが出来ない場合、現在の世の中では生きて行くだけでも大変でありますからして、我々が理想通りの生活を出来ない場合も幾らでもあり、またそれを咎める事の出来ない場合もあるかも知りませんが、そういう時にやはり一番心が咎めるのは当人だと思おうのです。ですからそういう気が咎められない様な生活だけする様に、私達は毎日でも骨を折って、朝怠ればあと夕方になって後悔するし、人と喧嘩したり、感情のまづい思いをすればそれがそのままさっぱりした気持ちになりきれない様に我々は造られているんだと思うのです。ですから私達は毎日を何か有効に有益に過す事が大事であると同時に、それが出来た時には、その晩は楽しく眠りにつける様に我々は造られていると思おうのです。

私の尊敬しているレオナルド・ダ・ヴィンチが云った言葉、これも極く当り前な、ありふれた言葉ではありますけれども、「一日をよく費された一日には安らかな眠りがある」という言葉は私は読んだ事がありますが、これはダ・ヴィンチが、最高の意味で彼が書いた、また仕事をしたりして、そうしてその経験から得た言葉であって、私が簡単に云った言葉とは少し意味が違うかも知れませんが、然し大小はあっても言葉の意味は間違いないと、それは本

当だと考えられるのです。これは一日の場合でもあてはまりますけれども、同時に一生の場合でもあてはまると思おうのです。私達が一つの生命を託されているのは、その生命を下らなく過してもいいために生命が与えられているのではなく、出来るだけその生命をよく生かす事が何者かに望まれて、私達はその生命を預って此の世に生きているのだと思おうのです。ですから私達はその生命に対して責任を感じて、出来るだけその生命を自分の力で此の地上によく生かせるだけよく生かして行くという事が出来たら、私達はそこに何か誇りを感じ、喜びを感じ、またそこに安心もあり、慰められもするのだと思おうのです。然し私達に託された一つの生命だけが尊いのではなくて、すべての人に託された一つの生命も、自分の中に託された一つの生命と同じ様に尊いのでありますからして、自分さえよければよいという考えは非常に間違った考えだと思おうのです。

私達は、自分を愛する如く他人を愛し、隣人を愛せよという言葉がありますし、また自分されたくない事は人にしてはいけない、自分にされたい事は人にしろという様な言葉がキリストだとか、孔子の云った言葉だと思おうのですが、そういう様な言葉に私は我々の生き方の最初の道徳といえますか、最初の拠り所があると考えるのです。キリストの教えに私達が深い感

動を受けるのも、彼が自分の目の中のうつぶり  
 (梁)は気にしないで、他人の目の中のちりを  
 気にするという様な事を云つていて、私達が自  
 分の欠点という様なものには無頓着であつて、  
 他人の欠点にはいやに感覚が鋭くて、他人を責  
 める事は急で、自分を責める事は非常に少い  
 という様な事を反省させる優れた言葉だと思  
 うのでありますが、私達は自分で直せるのは先  
 ず自分でありますからして、自分の欠点は一番  
 よく感じ、また一番よく直して行くのが人間の  
 進歩の最初の条件だと思つてののです。

ですけれども多くの場合、自分を直すとい  
 う事は困難であつて、他人の欠点を非難したり、  
 悪口するのは非常に簡単でありますからして、  
 他人を非難する事で自分が何か優れた様な感  
 じを持つ場合があると思ひますけれども、これ  
 は非常に卑屈な、また非常に間違つた考えだ  
 という風に、私は反省されるのです。やはり他  
 人の悪口を云つたからと云つて自分が進歩出  
 来るものではないと思つてののです。自分が進  
 歩するのはやはり自分の悪い所を一つずつ直  
 し、或いは自分の良い所を一つずつ磨いて行  
 くという所に自分の進歩があるのであつて、他  
 人の方には他人に委せて置けばそれでいいん  
 だと思つてののです。勿論忠告をするとか、  
 或いは注意するといふ事は決して悪い事  
 ではありませんけれども、それを聞く聞か  
 ないは他人の責任でありま

して、それを余り気にして自分の事を  
 我々の人生は進歩しない、面白くないもの  
 になつて行くのではないかと考へているの  
 です。

今の政党政治の行き方が、私には不服な  
 ものが多くあつて、他人の政党のする事  
 が全部悪く、自分の政党のする事は全部  
 良いといふ様な錯覚を起すのが、また何  
 となく世間の人にも影響して、自分の  
 事はそつちのけにして他人の事を注意  
 したり、他人の事に口を出すのは何か  
 非常に仕事をしてゐる様な錯覚を起す  
 場合があり得ると思つてゐますが、然し  
 それも一つの他人の欠点を見逃し過ぎる  
 のも必ずしもいいとは思ひませんけれ  
 ども、他人の欠点を見逃すよりは、自分  
 の欠点を見逃す方が更に恐ろしい事だ  
 と思つてゐるのです。

私達に託された一つの生命に責任が持  
 てないで、他人の生命に責任を持つとい  
 う事は不可能であるし、無能であるとい  
 う風に考へてゐるのです。ですから私達  
 は先ず自分を出来るだけ良いものにし  
 て毎日有益に過して、少しでも自分がも  
 のにならうといふ努力をして行く事が  
 大事だと思つてゐるのです。ですから私  
 達は、毎日怠けてゐてそれで喜べる様  
 には造られてゐない。私達は毎日何か  
 で進歩してゐるという事を自覚する事  
 が出来るか、自分で慰められる気持を  
 持つ事が出来るか

と思つてゐるのです。また人間とい  
 うものが何処迄進歩してもキリのない  
 ものでありますからして、何時迄たつ  
 ても進歩して行ける様に私達は造ら  
 れてゐるのだと思つてゐるのです。で  
 すから、私は幾らか年取つて来ましたが  
 しても、これからのものにならうとい  
 う気持を失わないで、毎日何か仕事  
 をし、何か勉強をして行かないとい  
 う心細いのは事実であります。そう  
 いふ風に人間が造られてゐるんだ  
 と思つてゐるのです。

もう一つ私は、人間といふのが出来  
 ない事はしなくていいつて事を考へ  
 ているのです。自分に出来ない事に  
 余計に心を使つて、自分の出来る事  
 が無頓着な場合が多過ぎると思つて  
 います。例えば過去のしくじりなら  
 しくじりが、私達が過去に戻つてそ  
 のしくじりを直すといふ事は絶対に  
 人間には出来ないと思つてゐるの  
 です。ところが過去のしくじりに余  
 りに氣を取られ過ぎて居れば、それ  
 は現在と未来に生かす事が出来た  
 時には、その事に拘泥するのも宜し  
 いけれども、どうにもならない事に  
 氣を使い過ぎれば、私達は神経衰  
 弱になるより他仕方がないと思つ  
 ています。また他人の事に対しても、  
 何か色々出来事に対しても、我々  
 には出来る事と出来ない事とがある  
 ので、私達は出来る事には何処迄  
 も氣を配り、ものを考へ、努力する  
 事が大事でありますけれども、出来  
 ない事に苦勞したりする事は愚かな  
 事だ

と思うのです。ですから自分の出来ない事によつて他人に非難されようとも、他人に批評されようとも、自分の出来ない事は誰が何と云つても出来ないのではありませんから、それに責任を持つ必要はないと思つてます。

然し自分の出来る事と出来ない事との間というものは、これは非常に微妙なものでありまして、出来ない事は必ず出来ないといふ決まらない場合もあると思ひますけれども、同時にどうしても出来ない事を出来るという風に錯覚を起す場合も私はあると思つてます。我々が賢いか賢くないかは寧ろそういう点に分るので、出来ない事に努力をし、出来る事に努力をしない人間は、家を建築するのでも家をだんだんに積み重ねて段々高い立派な家を作るのではなしに、積み重ねれば積み重ねる程家がこわれる様な積み重ね方をして行くのは、少し話がそれたかも知れませんが、私は愚かな話だという風に考へるのです。

私が一寸頭に浮んだままにしゃべらして貰いますと、私は日向の新しき村に居りました。今は埼玉にいますが、その時分に私達が農業の心得がまるでなくつて、ただ働けばいいという風にして働いていた場合が相当多いのです。自分の力で何とかして村のために尽したい、何とかして人類のために尽したい、自分の理想のために尽したいと思つるので、同じく鍬をあげるの

でも力一杯鍬をあげて土を耕している。土を耕している事が目的であるとすれば、何もそんなに力まなくてもいいのに、非常に高く鍬を振り上げたり何かして、自分の感激をそこに生かそうとしてる人を見かけたのであります。その誠意は充分認めてその熱心さには充分敬意を払いますけれども、然しそれでは長続きしないのも事実なのです。そこで農業に非常に精しく、本当に百姓だった人が村へ来まして、その人が村の畑の仕事をしているのを見ると、まるで私達が散歩している様な仕方、畑の仕事をしているのです。その人は畑を見まして、此の畑は幾ら手を入れても駄目だとか、これは少し手を入れれば生きるといふ様な事をよくのみ込んでいて、そしてその通りにすれば私達が見込がないと思つものが生き返り、私達が見込があるといふものが手の施し様がないといふ様な風になつて居るので、私達は、はじめて本当の農業を知つて本當によく農地を生かすといふ呼吸の一部が大部か知りませんが、解つた様な気がした事があるのです。

私達が自分の力で何か仕事をして行くにしましても、その仕事はどうすれば効果があがりすればする程自分の仕事が生きて行くかといふ事を始めは解らずにやつていつても宜いけれども、それが段々解つて行けば力の入れ様も解るし、それがどうすればよいかといふ事も解

つて、私達はだんだん賢くなつて行く事が出来るのだと思つて居ます。それはやはり自分のやつて行く中に段々會得されて行くので、他人に教わつてもものになるのではないのでありますけれども、然しやはり教わる事は教わつて行かないといふ、私達は無駄に努力する場合も非常に多いと思ひますから、私はやはり教わる事は充分教わつて行かなければならない。人類が今日進歩出来たのは色々の人から教わるものを教わつたから進歩する事が出来たので、若し我々が生れたままで何も教わらなかつたら、他の動物とは殆んどその能力の違ひのない様な生活をして、或いは動物以下の生活をしていたのではないかと考へられるのであります。然しそれだけに私達は自分でだんだん會得して行く事が大事だといふ風に考へるのです。

少し話がそれたかも知れませんが、兎も角、人類が人間に生れましてそして相当長い時間生きて来たとも云えますけれども、本當に長い時間と比較しましたら、実に短い時間だと云えるのであります。けれども、私は人間の目で物を見て行かなければならないといふ風に考へるのです。若し自然の目から見て、何かもつと大きな宇宙の目から見たら、我々の一生といふものは非常に短いと思ひますけれども、然し人間の目で見れば百年生きられたら化物みたいなものであります。私達はそれ程生きないでも



自分のしたい事は各々して行ける様に造られていると思うのです。人間というものは、この地上に長く生きるのが目的で造られたのではなくて、何か此の世に生きただけの事をして行く事が任務であつて、それを果して行く事が望まれている事だと、私は思うのです。

私はその例として、よく喋りもし、書きもしましたけれども、レンブラントを主題にした映画を想い出すのです。これはどういう風な映画かというと、レンブラントというオランダの絵描き、——今ゴッホの展覧会が上野に来て居りまして、ゴッホは三十七で死にましたが、色んな意味でゴッホには恩恵を受けていて今でもゴッホを尊敬して居りますけれども、然しレンブラントはゴッホ以下とは云えない非常に優れた人だと思ふんでありますが——、生きている当時は、ゴッホもそうでありましたけれども、レンブラントも、その当時の人に一時相当に認められたのでありますけれども、嫌われまして晩年は乞食の様な生活に陥つたのであります。何故陥つたかは伝記をしなければすぐ解りませんが、そのレンブラントが、乞食の様な生活をしまして或る海岸を歩いていて海岸に落ちてゐる腐つた魚を拾つて喰べる場面があつたのです。私はその場面を見て、見るに見かねて居りましたら、そこにまた一人の中年の金持らしい絵描きが見るに見兼ねてレンブラントに金

を恵む場面が次に来るのです。その金を恵む時にその男は、これで何か喰べるといふ事を条件にしてくれといふ事を云い出すのです。つまりその絵画はレンブラントを尊敬していたのだと思ふのであります。そのレンブラントが腐つた様なものを喰べて体を損ねるといふ事に心を痛めたので、それでお金を恵む気になり、そしてそれによつて喰べるといふ条件を出すのは、私達はその笑顔を見てもちつとも不自然とは思わなくて実に当然な申し出たと受取るのです。ところがレンブラントはそれで喰べるという約束をして幾つかの金貨らしいものを貰つてそれからすぐ食堂へ行つたかと思つと、彼は食堂へ行つたのではないのです。彼はそれを持つて絵具屋へ出かけて行くのです。そして絵具屋へ行つて絵具を注文すると絵具屋の主人が、あなたには貸しが多過ぎるからもう何も融通してあげるわけには行かないと云つて断るのですが、するとレンブラントは今喰べると云つて貰つて来た金を残らずそのテーブルの上に並べるのです。すると絵具屋は今迄の態度とはすっかり變つてにこにこしてレンブラントの注文通りの絵具を全部揃えてレンブラントに渡すと、レンブラントは意気揚々としてポケットを着乍ら自分の画室へ歸つて彼の傑作を描くのが映画の場面として描かれているのです。これを見て多くの人は、——絵を描かない人

は多いでありましょうし、絵を描いたにしても、凡そレンブラントとは段の違う様な下らない絵を描いている者達でありましょうけれども、それにも拘らず、その場面を見ると私達は涙ぐましい様な感動を受けたいわけには行かないのです。若し人間が此の地上に生きるという事が、人間の唯一の目的であり、最大の目的であつたら、レンブラントが食堂へ行かないで、そうしてその人間が云つた事を私達は嘲笑しなければならぬし、惜しい気がしなければならなかつたらうと思ふのです。ところがそうでない事を作者も知つているし、映画人も知つているし、人間の心の内には何かこのものに自分を生かすよりもつと以上にこの地上で何かして行きたいといふ本能が私には深く支えられているといふ事を知つているから、そういう場面をもつて来て、そしてそのレンブラントの映画の一番最高の感動させる場面として、人間といふものは、此の地上に生きる事が目的ではなくて何か此の地上に働いて行くといふ事が目的な様に我々は造られていると思ふのです。そういう風に造られてあればこそ、人類は今日迄進歩して来て、人類の何人かの人間は悲惨な目にも遭い、色んな目にも遭い、生きても居られなくて、赤ん坊の時死んだ人もありましょうし、色んな事もありましょうけれども、それにも拘らずそれを生き抜いて、そうして働くだけの事

を此の地上に働いた者を、我々は感歎しないわけには行かない様に人間は造られているんだと思うのです。

ですから私達が何か仕事をするのでも、こんな事をしてどうせ死んでしまえば同じ事だという風には我々は造られていない。何か發明する人々でも、發明しても死んでしまえばそれでおしまいだという風には造られていないで、何かやはり發明する迄は生かして貰いたい、此の一つの事業が出来上る迄は生かして貰いたいという風に願うのが人間らしい願いだと思ふのです。私はそれを見ましても、人間が此の地上に生きたのはただ肉体を健康に保つためではなく、また此の地上に出来るだけ長生きするためでもなく、ただ此の地上に一人の人間として生れた以上は一人の人間として為すべき事を出来るだけ忠実に果す事が我々の任務でもあり、望まれている事でもありますから、それを果す事が出来たら、その人は誇りを持って生きる事も出来、また安心して何か一種の自覚を以て此の世から去る人も出来るし、またそういう人々の姿を見ると、我々が發奮しないわけには行かないように我々は造られていると思ふのです。

何のために私達はそういう事に發奮し、そういう事に本気になり、むきになり、真剣になるかという事は解りませんが、その真剣に

なり、むきになり、本気になるという事実を私達は素直に認めなければならぬと思ふのです。子供が病氣をして、どんな理由にせよ此の世の中が如何に悲惨な悪い世の中であるという風に懷疑を持った親があつたとしましても、子供が病氣が癒つた時に本当に喜べない親はないだろうと思ふのです。我々を造つてくれた者は何を望んでいるか解りませんが、その望み通りに、私達が本当に生きる事が出来た時、生きる事を本当に喜んで感謝する念が自ずと湧いて来る様に我々は造られているんだと思ふのです。またそういう事実を見た時に、私達は感動しないわけには行かない様に造られていて、そこに人間というもの、皆お互いに愛し合つて、自分も生き他人も生き、全部が生きてという事を乞ひ願っている者が何処かにあつて、その意志を私達が畏んで自分の出来ない事はしなくていいのでありますが、自分の出来る小さい範囲でもその目的に向かつて我々がこつこつ働く事が出来たら、私はそれで何人かは生きる喜びを与えられ、お前はそれでいいんだ、その瞬間はそれでいいんだ、という風な感じを与えられ、その人も生きていく権威を内に感ずる事が出来るのだと思ふのです。

私達は万能でもありませんし、私達の肉体は非常に弱く造られて居ります。けれども、然しそれにも拘らず私達の心は何時でも大きな望み

を失わずに、我々の造られた理想を失わずに、その理想に向つて一歩一歩コツコツと進んで行く事を何者かから命じられていて、それが出来ない時は出来ないと言ふ事がはつきり解る時は、それでも許されるでありましょうけれども、その時でも私達は理想を失わずにコツコツと働くだけの意志は心の奥底に持ち、誠意を持ってそれを望む事が出来たら、何者かが私達を許してくれ、祝福してくれるという風に私は信じているのです。(一)

人生は理窟ではなく事実だ。僕が今日樂天的な氣持であられるのも、僕は自分の為に生きてゐないからだ。勿論僕は聖者ではない。快樂を輕蔑してゐないし、金がほしくないことはない。生活だつて安樂を望まないとは言へない。しかしそれが自分の目的ではない。自分の目的はこの地上に少しでもいい仕事をしてゆきたい、少しでもいい言葉を残してゆきたいといふことだ。そして自分が生きてゐることを喜んでゐてくれる人を益々喜ばしたいと思つてゐることだ。僕個人にも敵はあるかも知れない。昔はたしかにあつたと言つていいやうに思ふ。しかし今僕は自分の個人的な敵のことは考へない。そして自分が生きてゐることを喜んでくれる何人かの人の為に、それは数十人か、数百人

か、数千人か、数万人か、それは知らない。恐らくさう大勢の人ではあるまい。しかしそれ等の人は心から、僕の生きてゐることを喜んでくれ、僕のいい仕事をするのを待つてゐてくれるのを信じてゐる。

（武者小路実篤著「人生の書」より）

※当DVD収録の「講演録」には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。